広報たかなべ

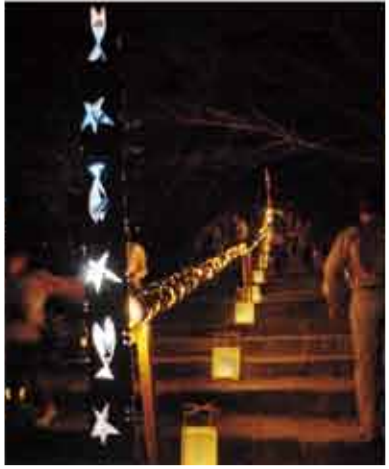
2013. 11. 15 NO. 385

・第13回 高鍋城灯籠まつり
・特集～口蹄疫からの復興・再生
　悲しみをのりこえて新たなスタート
・平成24年度 高鍋町決算状況
・宝くじの助成金で整備されました
・地域と一緒に学校をつくる　コミュニティ・スクール
・犯罪に遭わないために
　身の回りの「鍵かけ」！できていますか？
・「町民の日」記念式典・高鍋町社会福祉大会
・「お菓子のはせがわ」農林水産大臣賞を受賞！
・《姉妹都市交流》「鷹山塾」に参加
・第2回高鍋町景観絵画コンクール・景観写真コンテスト受賞者決定
・まちの話題
・わが町の宝物

第13回 高鍋城灯籠まつり会場（高鍋農業高等学校グラウンド）

秋の夜に咲いた大輪のひまわり

今年の灯籠まつりでは、高鍋農業高等学校の生徒自らが、自分たちの学校のグラウンドに灯籠アートのデザインと設置を行いました。グラウンドには、高鍋町の地域再生のシンボル「ひまわり」が描かれ、一面に広がる灯籠の輝きに、まつりに訪れた人が時間を忘れて見入っていました。



第13回 高鍋城灯籠まつり

１０月１２日、１３日の２日間にわたり、第１３回高鍋城灯籠まつりが舞鶴公園周辺で行われ、約５万人の人出でにぎわいました。
このまつりは、高鍋藩の名君である秋月種茂公が創設した明倫堂の教え「人の倫」を育む心「精神文化」に明かりを灯し、受け継ぎつたえていくことを目的としたまつりです。
約１万基の灯籠で飾られた会場では、創作灯籠コンテストやステージイベント、物産展、そして町民総踊りなどが行われ、町内が一体となって盛り上がりました。
また、灯籠から漏れる美しく優しい灯りが、会場周辺を幻想的な世界に包み込み、訪れた人たちの心を和ませてくれました。

TAKANABE CASTLE TOUROU FESTIVAL 2013

高鍋城灯籠まつりは、実行委員会メンバーをはじめ、多くのボランティアの皆さんによって支えられ、開催されています。
その皆さんに心から感謝しながら、活動の軌跡を写真で紹介します。

来年もどうぞ
よろしくお願いします

悲しみをのりこえて 新たなスタート

口蹄疫埋却地再生活用対策事業により行われている再生整備。町内１７カ所をこれから平成２７年度までに計画的に整備を行う。染ケ岡地区の埋却地では９００平方メートルを農地に戻す整備が始まっている

口蹄疫発生

平成二十二年四月二十日。家畜伝染病である口蹄疫が都農町で発生し、その後、瞬く間に感染が拡大し、五月十四日、ついに高鍋町でも口蹄疫の発生が確認されました。

目に見えないウイルスとの戦いは、八月二十七日の終息宣言が出されるまで続き、高鍋町で約三万四千頭にも及ぶ家畜が殺処分され、この町からすべての家畜が姿を消しました。

多くの家畜の命が奪われた悲しみだけでなく、移動制限やイベントの相次ぐ中止なども大きく影響し、町内の全産業に暗く大きな影を落としました。

当時、口蹄疫で殺処分された家畜を埋却するため、連日懸命な作業が行われた。作業員たちは梅雨時期の雨と暑さの中で家畜の無残な姿を目の当たりにし、肉体的にも精神的にも追い込まれた

一歩でも前へ

当時、町全体が元気を失い、いつになったら、家畜の鳴き声や街行く人たちの笑い声が聞こえるようになるのかと不安な日々が続きました。

しかし、県内だけでなく県外からも「頑張れ！負けるな！」とあたたかい応援の言葉や力強い支えもあり、少しずつ復興・再生に向けて歩み出しました。

その後、町では、口蹄疫により甚大な被害を受けた畜産業などの再生を目的に、高鍋町口蹄疫復興対策基金の設立をはじめ、商店街などと協力して、復興イベントの開催や口蹄疫復興プレミアム商品券の販売を行うなど、経済の再生に取り組みました。また、今では日本最大規模を誇るまでになった染ケ岡地区のひまわり畑は、口蹄疫で沈んだ町民の心に元気と笑顔を運んでくれるなど、地域からも元気を発信しました。

悲しみをのりこえて

口蹄疫が終息して三年。

今年、埋却地の発掘禁止期間が満了したことから、土地の再生利用が可能となり、先月、関係者参列のもと中尾地区の畜魂碑前で、慰霊祭および埋却地再生工事の起工式が行われました。

町では、これから三年間をかけて、十七カ所（二十一・二ヘクタール）の埋却地を計画的に農地に戻していく予定です。

口蹄疫で犠牲となった家畜たちの冥福を祈りながら、二度とあのような惨劇が起こらぬよう参列者は願いを捧げた

―― それぞれの思い、そしてこれから未来へ向けて ――

困難をのりこえた「高鍋魂」を持つ元気な笑顔を紹介します

豚

町内で養豚業を営む佐藤雅行さん（左）と従業員の石坂和樹さん（中央）、木村彩葉さん（右）

口蹄疫が発生したとき、今いる豚たちは、そして養豚業はどうなっていくのだろうと不安な毎日でした。

そんな中で一番つらかったことは、畜舎にいる豚たちにワクチン接種をするこになったとき。「助けてあげられない」という悔しさと悲しさでいっぱいでした。

悲惨な状況と先が見えない中で、何をしたら良いかもわからない日々でしたが、あの時、たくさんの人たちの心遣いに支えられ、頑張ることができました。

３年が経過し、尊敬する父が歩んできた道をたどりながら、養豚業で企業として成り立つこと、そして県外から就職してくれた社員が「畜産家になって良かった、高鍋に住んで良かった」と思える会社づくりに励みたいと思います。

口蹄疫で死んだ家畜たちに報いるためにも、高鍋の産業が手をつなぎ、活力ある高鍋町をつくる力になりたいと思います。

牛

町内で乳用肥育を営む藤原一信さん

口蹄疫が発生したあのとき、一番大変だったことは、埋却地が決まらないことでした。

出荷もできず、これから殺処分する牛たちに餌をやり続けました。

自分の飼っている牛にも病気がうつり、日々症状が悪化する様子をどうすることもできず、ただ見守るしかできなったつらい時期もありました。

口蹄疫は悲痛な経験でしたが、学んだこともたくさんあります。防疫の徹底はもちろん、以前から興味のあった食肉加工についても牛がいないときに勉強しました。そして何より学んだことは、自分は多くの人から支えられているということです。あの経験から、みんなに恩返しがしたい、町のために、仲間のために何かしたいと思うようになりました。

これから、さらに高鍋町を盛り上げるためにも、仲間と一緒に力を合わせて頑張っていきます。

農

高鍋町茶業振興会 青年部会長
永井克昇さん

口蹄疫が発生した時期は、一番茶の摘み取りが終わるころでした。私の家が持つ茶畑は宮崎県家畜改良事業団の正面にあるので、立ち入りができない時期もありました。

これから茶葉の収穫ができない時期が続いたらどうしようと不安な日々でした。

幸い立ち入り禁止期間が短く、お茶に影響はありませんでしたが、畜産関係者の方の気持ちを考えるといたたまれない思いでいっぱいでした。こんなことは二度とあってはいけないと、あれから農業に携わる人たちも農機具など、病気を運ばないよう意識して消毒を行っています。

今年から高鍋町のＳＡＰやＳＳ、農協青年部、商工会議所青年部と合同定例会を行いながら、横の連携を強化する取り組みを行っています。

それぞれの特色を活かしながら協力し、これからさらに高鍋町を元気にしていきたいです。

商

町内で飲食業を営む圖師孝一郎さん（左）と弟の健次さん（右）
孝一郎さんは、高鍋を盛り上げるために高鍋観光夢玉製作所の代表としても活動している

口蹄疫が発生した当時、客足が途絶え仕入れにも影響が出てきて、こんな状態がいつまで続くのだろう、そしていつになったら商店街に人が戻ってくるのだろうと不安でした。

発生からしばらくは、店のことも心配でしたが、少しでもみんなの力になりたいと消毒作業を手伝いました。

終息宣言が出てしばらくすると、少しずつ客足も増え、宴会も入るようになりましたが、畜産関係の方が店に顔を出してくれるようになったとき、やっと安心することができました。

これから、店としての目標は、素材を大切に扱う調理法で、質の良い料理を提供できる店にすること。そして、地元の食材を直接購入し、調理するという地産地消にも力を入れていきたいと思います。

また、店以外での目標は、子どもたちの笑顔があふれる町づくりに力を注いでいきたいと思います。

【取材を終えて】

口蹄疫発生から三年が経過した今、忘れてはいけない、風化させてはならないと思いながらも、月日の流れとともに、その記憶が薄れていたことをこの取材を通して感じました。

あらためて今、日常の中で自分たちができることを考えました。

まずは、各カ所に置かれている消毒マットを使用して防疫に協力すること、そして地元で取れる食材など、地域で売られているものを利用すること、そして何よりも、あのとき起こった惨劇を一人一人が決して忘れないこと。このようなことが、口蹄疫からの再生・復興の支えになるのだと感じました。

これからの町産業の振興

産業振興課
田中 義基 課長

口蹄疫発生時からこれまで、いろいろな思いを抱きながらも、前を向き、夢を持って進んでいる各事業者の皆さんの姿を頼もしく感じています。

困難をのりこえた皆さんが新たに取り組まれている農商工連携での事業展開が、より充実するよう、私たち行政はサポートしていきます。

そして、一緒に町の産業を振興・活性化させ、元気な町づくりに取り組んでいきたいと思います。

平成24年度 高鍋町の決算状況を報告します

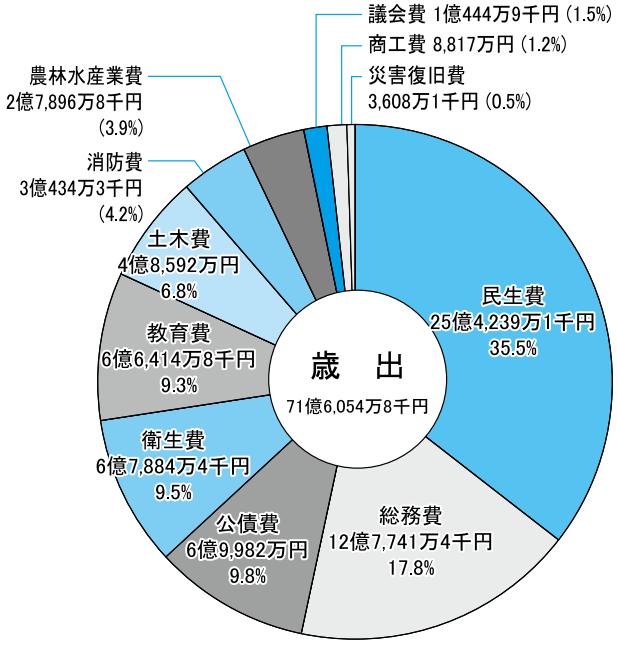
町民の皆さんが納めた税金や、国・県からの交付金などは、どのような形で、どのような目的に使われているのか…。町の財政状況を広く知らせるために、毎年、決算を公表しています。

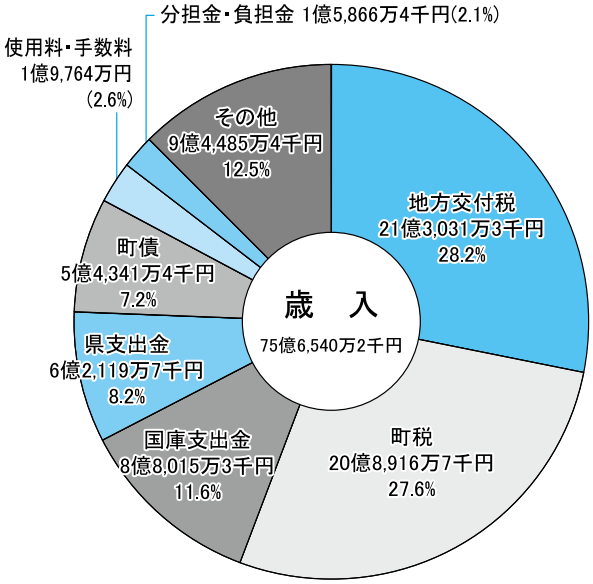
平成２４年度一般会計の決算額は、歳入総額７５億６，５４０万２千円、歳出総額７１億６，０５４万８千円となりました。

歳入面では、地方交付税が約５，１００万円の減、町税も固定資産税の減が影響して約２，４００万円の減となりました。国庫支出金は障害者自立支援給付費等負担金約４，９００万円、地域介護・福祉空間整備等施設整備交付金３，０００万円の増もあり約４，４００万円の増となりましたが、県支出金は地域環境保全対策費等補助金７，９００万円や、緊急雇用創出事業補助金約７，７００万円の減が大きく、約１億５，３００万円の減となりました。繰越金も約８，５００万円減となり、歳入全体では１億７，６７０万６千円の減となりました。

歳出面では、民生費は近年の扶助費の増額傾向に伴い約６，５００万円の増となり、歳出の３分の１以上を占めることとなった昨年度からさらに増加しました。総務費は基金積立金約８，６００万円の減、地域グリーンニューディール事業約８，２００万円の減などの影響で約１億５，８００万円の減となり、歳出全体では１億４，６０４万５千円の減となりました。公債費は平成２０年度のピーク時から減少を続けていましたが、今年度の約３，７００万円の減の後は増加に転じる見込みです。

実質収支は昨年度から６，４５８万２千円減少し、３億５，７２６万６千円となりました。ただし、平成２３年度と比較すると基金積立金を減らしてのものだけに、実質的には１億５，０００万円程悪化したと見ることもできます。税収の減少が続くなか、公共施設の老朽化や災害対策に係る財政需要が見込まれることを考慮すると、心許ない決算となったといえます。そのため、これからも中長期的な計画に沿って歳入の確保・歳出の抑制を図り、計画的なまちづくりに取り組んでいく必要があります。





◎公債費

一般会計地方債残高（平成 24 年度末現在）	66 億 9, 590 万 7 千円

◎水道事業

区　分	歳　入	歳　出
収益的収支	4 億 4,104 万 2 千円	4 億 2,663 万 5 千円
資本的収支	758 万 8 千円	2 億 7,753 万 3 千円

◎特別会計

区　分	歳　入	歳　出
国民健康保険	30 億 1, 229 万 2 千円	27 億 8, 945 万 1 千円
後期高齢者医療	4 億 4, 819 万 7 千円	4 億 4, 770 万 2 千円
下水道事業	4 億 464 万 3 千円	3 億 8, 927 万 7 千円
介護認定審査会	1, 134 万 8 千円	1, 033 万 6 千円
介護保険	14 億 9, 590 万 2 千円	14 億 3, 439 万 8 千円
一ツ瀬川雑用水管理事業	1, 852 万 6 千円	1, 492 万 4 千円